

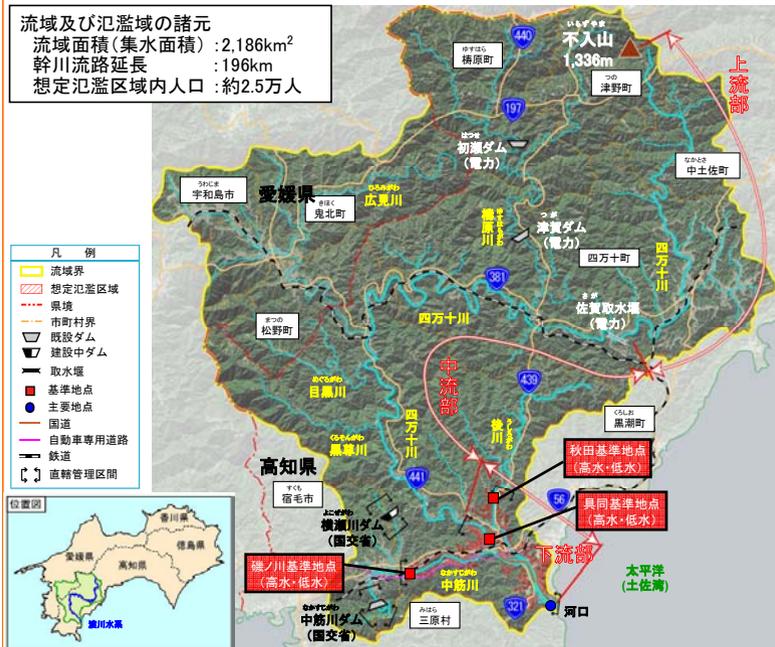
渡川水系河川整備基本方針の概要

流域及び河川の概要

- 年平均降水量は約2,900mmで、全国平均(約1,700mm)の約1.7倍。全国でも有数の多雨地域
- 流域の約95%を山地が占め、本川下流部と支川(後川と中筋川)のわずかな平地に人口・資産が集中。後川や中筋川は低平地を流れ、洪水時に本川水位の影響を受け内水被害が発生しやすい
- “日本最後の清流”と言われており、四万十川そのものが観光資源となっており、四万十市では年間約86万人もの観光客が訪れる

流域及び氾濫域の諸元

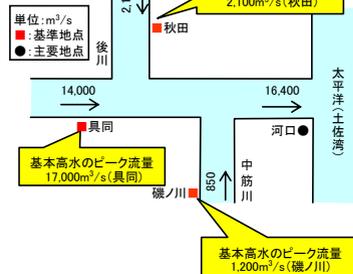
流域面積(集水面積) : 2,186km²
 幹川流路延長 : 196km
 想定氾濫区域内人口 : 約2.5万人



災害の発生の防止又は軽減

- 既定計画策定後に計画を変更するような出水は発生しておらず、流量データによる確率からの検討、既往洪水による検討等を総合的に検討し、河川整備基本方針においても既定計画と同様に、基本高水のピーク流量を、四万十川では基準地点具同で17,000m³/s、後川では基準地点秋田で2,100m³/s、中筋川では基準地点磯ノ川で1,200m³/sと設定

【流量配分図】



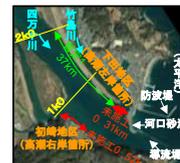
- ・洪水調節については、四万十川では既存施設の有効活用等により対応を検討し、実施。中筋川では、既存の洪水調節施設に加え、新たな洪水調節施設を整備
- ・中筋川では水位低下を図るため、河道掘削及び洪水調節施設の整備を行うとともに、背割堤の延伸について、その効果や環境上の影響等を検討
- ・関係機関と連携・調整の上必要に応じて排水機場の整備などの内水対策を実施
- ・東南海・南海地震に対して、津波遡上により浸水被害が想定される水門の耐震補強、ゲート操作の自動化・高速化を実施
- ・河口部では高潮対策を実施



ダム高 73.1m
 総貯水容量 1,260万m³
 洪水調節容量 860万m³



ダム高 72.1m
 総貯水容量 730万m³
 洪水調節容量 380万m³



耐震対策及び津波対策に必要な津蔵治水門

河川の適正な利用及び流水の正常な機能の維持

- 四万十川においては、広域的かつ合理的な水利用の促進を図るなど、今後とも関係機関と連携して必要な流量を確保する。後川においては、広域的かつ合理的な水利用の促進を図るなど、今後とも関係機関と連携して必要な流量の確保に努める。中筋川においては、水資源開発施設の整備や既存施設の有効利用を図るとともに、広域的かつ合理的な水利用の促進を図るなど、今後とも関係機関と連携して必要な流量を確保する
- 具同地点における流水の正常な機能を維持するため必要な流量は、かんがい期概ね14m³/s、非かんがい期概ね9m³/sとする
- 秋田地点における流水の正常な機能を維持するため必要な流量は、かんがい期概ね0.4m³/s、非かんがい期概ね0.3m³/sとし、以て流水の適正な管理、円滑な水利用、河川環境の保全等に資するものとする
- 磯ノ川地点における流水の正常な機能を維持するため必要な流量は、かんがい期概ね1.2m³/s、非かんがい期概ね0.7m³/sとする

河川環境の整備と保全

- 四万十川上流部では、アマゴやモズクガニ等が生息・繁殖する自然豊かな溪流環境の保全に努める
- 四万十川中流部では、アユカケやテナガエビ等が生息・繁殖する瀬・淵環境等の良好な河川環境の保全に努める
- 四万十川下流部では、アユの産卵場となる瀬、ヨドシロヘリハンミョウ等の昆虫類やハクセンシオマネキ等の生息・繁殖環境となっているヨシ帯や干潟環境の保全に努める。また、アカメ等の仔稚魚の生息場となっているコマモや四万十川を代表する水産資源であるスジアオノリの生育環境の保全等に努める
- 後川では、ヒナイシドジョウ等の魚類の生息・繁殖環境である瀬の保全に努める
- 中筋川では、セズジイトンボ等が生息・繁殖する湿地環境の保全に努める

